

長縄 宣

美術に言葉はいらない……それでも人に伝わるものがあると信じていた。言葉になる以前の、脳裏に浮かぶ鮮烈なイメージが無言の内に人に感動を与える——そうした視覚芸術の世界に踏み込んだはずなのに、なぜか言葉を扱う仕事を通して、美術に関わり十数年が経った。

その間に「言葉を扱う美術」、あるいは「言葉をテーマとした作品」に幾度となく出会った。そのどれもが、文学派で叙情的であったり、タイポグラフィーのように記号化され、デザイン的な印象の強い作品がほとんどであった。そんな時、言葉をテーマに扱いながらも見事にアートとして変化し、あくまで素材として物質化された言葉を造形に活かすセシル・アンドリュの仕事に出会い、衝撃を受けた。

1990年から本格的に始められたその制作は、修行僧のように坦々と、言葉そのものを紐解く行為と丹念な手仕事によって作り出されていった。

本の文字を丁寧に修正液で消していく行為を見せる初期シリーズ。それは、天然石や台形の土台に納められ、言葉の墓石のように作品化された。またある時は、文字を消した紙を粘土に入れて握った手形の残る塊を、「言霊」のように点々と床に並べた作品。あるいは文字が印刷された紙を縄目に縋って、紐として様々な形態に造形化した作品などがある。

今回発電所美術館の個展で中2階に記念碑的に展示された、1999年の〈犠牲(IMMOLATION)〉は、過去の作品の中でも言葉の意味を否定的に消し去ろうとする強い意志が感じられる作品だ。それは活版印刷に使われていた鉛の活字部分がハンマーで叩きつぶされ、黒いテーブルの上に無数に並べられている。微かに文字が読みとれるかどうかという、言葉が徐々に物質化していく過程を作品化したもので、「記号」と「物質」の微妙な狭間を行き交う「言葉の石畳」のような様相を帯びている。

また〈開口(OUVERTURE)〉(2010)は、フランス語の辞書一冊を背表紙側の一文字目の後で切断し、黒いボックス

の奥に納め、切れ目の側から微かに文字らしきものが見える作品である。箱の中の空間＝元の辞書の大きさであり、26点あるのは、アルファベットのA～Zの数を意図している。それは、決して読むことのできない「言葉の棺」のように思える。セシルは、ひたすら言葉の意味作用を取り払い、打ち消した後に残る「言語の痕跡」を造形化することで、「言葉とは何か」という根元的な問いを我々に投げかけてくる。

そうした文字を消す行為とは逆に、言葉を想起する「原稿用紙の柵目」を紙や金属などで作り、言葉を納めるべき美的グリッドとして、作品形態に取り込む方法も現れる。この柵目は、セシルにとって日本独特な言葉を書く際の象徴的図形に思えるようだ。その柵目によって区切られた余白は、言葉が書かれることを待っている場所である。そして、セシルにとって様々なグリッドはすべて、創造が生まれる美術的なイメージの源泉となり得る。

セシルの手法は、年代によって変化していくのではなく、同時並行的に現れ、その手法は現在も続いているものがほとんどである。それは作家にとって、常に自身が展示する際に展示場所を熟慮し、空間造形的な意識を持ち合わせた上で、空間と関係を持つための作品のコンセプトやフォルムにふさわしい手法をその都度選択しているからではないかと推察する。言葉をテーマとしながらも、作品が文学的・叙情的にならない理由は、セシルの造形意識が空間を構造的に捉えられるからかもしれない。

発電所美術館での個展を依頼したいと思うようになったのは、そうした言葉を主題としながらも、空間造形として十分に魅せてくれるアーティストの素質を感じたからに他ならない。そのきっかけになったのは、2005年に金沢市民芸術村で発表された〈MANNA〉である。世界各国の辞書をシュレッターにかけ床に敷き詰めることで、様々な国々の言葉の差異を取り払うかのような作品であった。

その時、意味をなくした言葉が、新たな意味を帯びて芽生える「言葉の草原」のような美しき大地を思い起こした。今まで言葉の意味を掻き消すような否定的な作品がほとんどであったが、シュレッターにかけられ一度「無」に還元された言葉たちが、そこでは美的に再生を果たしていた。世界がグローバル化する現代においてもまだ、言葉の違いは、人々の交流に障壁となって立ちはだかっている気がする。美術や音楽といった芸術が、イメージを人に伝える共通言語として流通していく、そんな夢を抱かせてくれる作品であった。

そして今回美術館において実現した新作〈CULTURE²〉は、芸術や文化そのものについての壮大なテーマを内包している。

現地へ下見に来たセシルは、まず美術館周辺の風景に着目した。黒部川扇状地に広がる田園風景は、他の地域よりも区画整理された真四角な田畑が特徴である。そこにセシルは、原稿用紙の罫目のイメージを重ね合わせる。そして農耕的な風景の中に建つ発電所美術館の意味を「CULTURE」という言葉をヒントに作品化することを思い立つのだ。

フランス語では「CULTURE」という言葉に、大地を耕すという農耕文化の意味と、美術や音楽といった芸術文化の両方の意味が含まれるという。「農耕」と「文化」が「CULTURE」というひとつの言語の中で融合しているフランスでは、いかに芸術に根ざして生活を営んできたかというその国の長い歴史を感じさせてくれる。一方、日本ではどうだろうか。衣食住の生活の中で、「芸術で飯は食えぬ」というような、かくもかけ離れた世界として庶民には敬遠されがちではないだろうか。

セシルには、田園風景の中に佇むこの発電所美術館が、「農耕」と「文化」が融合する象徴的な建物として目に映ったことだろう。「農耕」を発想させる素材として選んだ、稲や野菜の苗を育てる育苗トレーは、黒い色彩と整然と並ぶ姿から、一見無機質な印象を与える。だが、細かな凹凸と水抜き穴を発見し「育苗トレー」だと認識した時点で、地下に根を張ろうとする植物の生命力と結びつき、一瞬にして有機的なイメージへと変化する。導水管からの水流を思い起こせば、そこは水耕栽培の行われる地下空間へと変貌していく。またトレーが原稿用紙に関連する複数の罫目を持っていることで、セシルの好む美的グリッドが現れている。

育苗トレーは黒い木枠に張り付けられ、中2階の床の高さで水平に吊されている。美術館では中2階の床レベルで水平に、そして一面に作品を吊したのは初めてであり、そのことで空間が1階と2階に視覚的に分けられる。見上げた印象と見下ろす印象とが、まったく違うイメージとして見えるという違いを、セシルは新作の構造上の重要なポイントとして構想段階から重視していた。1階は「農耕」を意識させる地下空間であり、中2階は言葉や美術といった「芸術文化」が芽生える地上として、イメージを構築していった。

静寂の中で宙に浮かぶ無数の育苗トレーの上には、

シュレッターにかけた新聞紙が多量に敷き詰められている。階段を登る途中、薄暗い地下空間から一転して、陽の光を浴びて一斉に芽生える草原のような、心地よい無言の大地が眼に飛び込んでくる。一つの木枠は5桁に仕切られており、原稿用紙の罫目と区画整理された田圃のイメージが重ね合わされている。使われた新聞紙はあくまで地元で読まれている新聞であり、日々消費されていく言葉の象徴でもある。言葉を粉碎し、読めなくなった文字は育苗トレーに入れられることで、耕された大地のように、再びアートのイメージを芽生えさせる肥沃な大地として再生するのだ。今回セシルは、農耕的な生活文化からこそ、美術などの芸術文化が生まれるという「芸術の源泉」を問う壮大なテーマを作品の基本構造として、空間を見事に取り込みながら「言葉」と「アート」が生み出す新たな地平を見せてくれた。

セシルの作品は、コンセプチュアルでミニマル・アートの傾向が強いように見えるが、いつも見る者に「言葉と美術」の関係を問いかける「優しい糸口」が開かれている。そして極限までそぎ落とされ、洗練された作風の裏には、常に熟考に熟考を重ねたコンセプトがある。言葉から導き出された作品のシンプルなイメージは、語らずとも豊かな想像を膨らませてくれる。日本語には「言葉を紡ぐ」という表現がある。セシルは、縫った言葉の糸を解きほぐしながら、また新たなアートの美しき糸を紡ぎ出そうとしているのだ。

セシルが追い求めているものは、おそらく「言葉の意味するもの」や「記号化された文字」ではなく、その逆の行為——意味を持つ言葉を解体し、記号から記を消し去った後に残る「言葉の原子」のようなものを「造形の核」としてアートの世界に持ち込み、「言葉」あるいは「美術」の限界と可能性を視覚化することにある。

その限界と可能性は、果てなき実験的な制作の先に見えてくるものだ。セシルが切り開いた言葉とアートが接する地平は、静寂の内に水平に吊された〈CULTURE²〉が見せた平原の遙か彼方まで続いている。そこでは空と大地の境目が溶け合うような、言葉の概念と美的造形とが融合するイメージの源泉が、セシルには見えているのかも知れない。

(下山芸術の森 発電所美術館 学芸員)